





ひつどくせんてい
必読選定

ぶんけんじ どうどくしょかん 文研児童読書館^{しよき}(初)

むねがドキドキ……、なみだがポロリン……。

ドヒャーッとびっくり！ 大発見だーっ！！

ぶんけんじ どうどくしょかん
文研児童読書館には、そんな楽しい本がいっぱい！

世界の名作

まほうをならいにいった少年

まほうをならいに、森へいった少年は、まじょにつかまり、たべられそうになる。でも……。ほかに4つの話。

●ベヒシュタイン 作
●植田敏郎 訳 ●司 修 絵

日本の名作・むかしばなし

おばけばなし 千葉県三どうわ集

まっくらな夜に道や月夜の庭には、どんなおばけがあらわれるのだろうか。ほかに、「幸平じいさんと馬車」など、5つの日本どうわ。

●千葉県三 作 ●小松久子 絵

おやゆびひめ アンデルセンどうわ集

花から生まれたおやゆびひめ。ちっちゃくってかわいくって、お日さまのすきなおやゆびひめにおこったかなしいできごととは……。

●山室静 訳 ●松本文子 絵

白鳥になったおもち

国のれきし、地名のいわれ、でんせつなど、「風土記」をもとにしてつくられためずらしい8つのお話。

●福田清人 著 ●赤羽末吉 絵

空とぶ木馬 アラビアン・ナイト どうわ集

ふしぎな空とぶ木馬におひめさまがさらわれた。さて、いしやにばけた王子さまは、ぶじにおひめさまをつれもどすことができるでしょうか。

●山主敏子 文 ●石倉欣二 絵

新しい物語

まほうだらけの島

女の子が大きらいな王さまは、王女さまをおそろしいうずまき島にとじこめてしまった。王女さまをたすけるには、むずかしいさんすうをとかなくては……。

●ネスビット 作 ●小野木学 絵
●中山知子 訳

中国のはなし

天にのぼった子ども 中国どうわ集

わるい役人のいいつけどおり、子どもは一本のなわにつかまって、ももをとりて天へのぼった。中国につたわるふしぎな7つのお話。

●関英雄 編著 ●久米宏一 絵

くまのりょうし

ウズラが「スイイチキッテ、スパーットネロ！」となくと、ふしぎにねむくなるのです。犬やクマもでてくるソビエトのたのしい動物物語。

●チャルーシン 作・絵 ●宮川やすえ 訳

新しい伝記

かみのけぼうぼう

わたしたちのまわりにおこるいろいろなできごとをとりあげ、あたたかい人間のお話をあつめたもの。人の生きかたについてよくかんがえてみよう。

●石森延男 著 ●清沢治 絵

S F (うちゅうぼうけん物語)

ちびっこきょうりゅうの星

2ひきの子ねこがたずねた星には、ふしぎなきょうりゅうがいっぱい！つぎつぎとゆかいなぼうけんをくりひろげるうちゅうぼうけん物語。

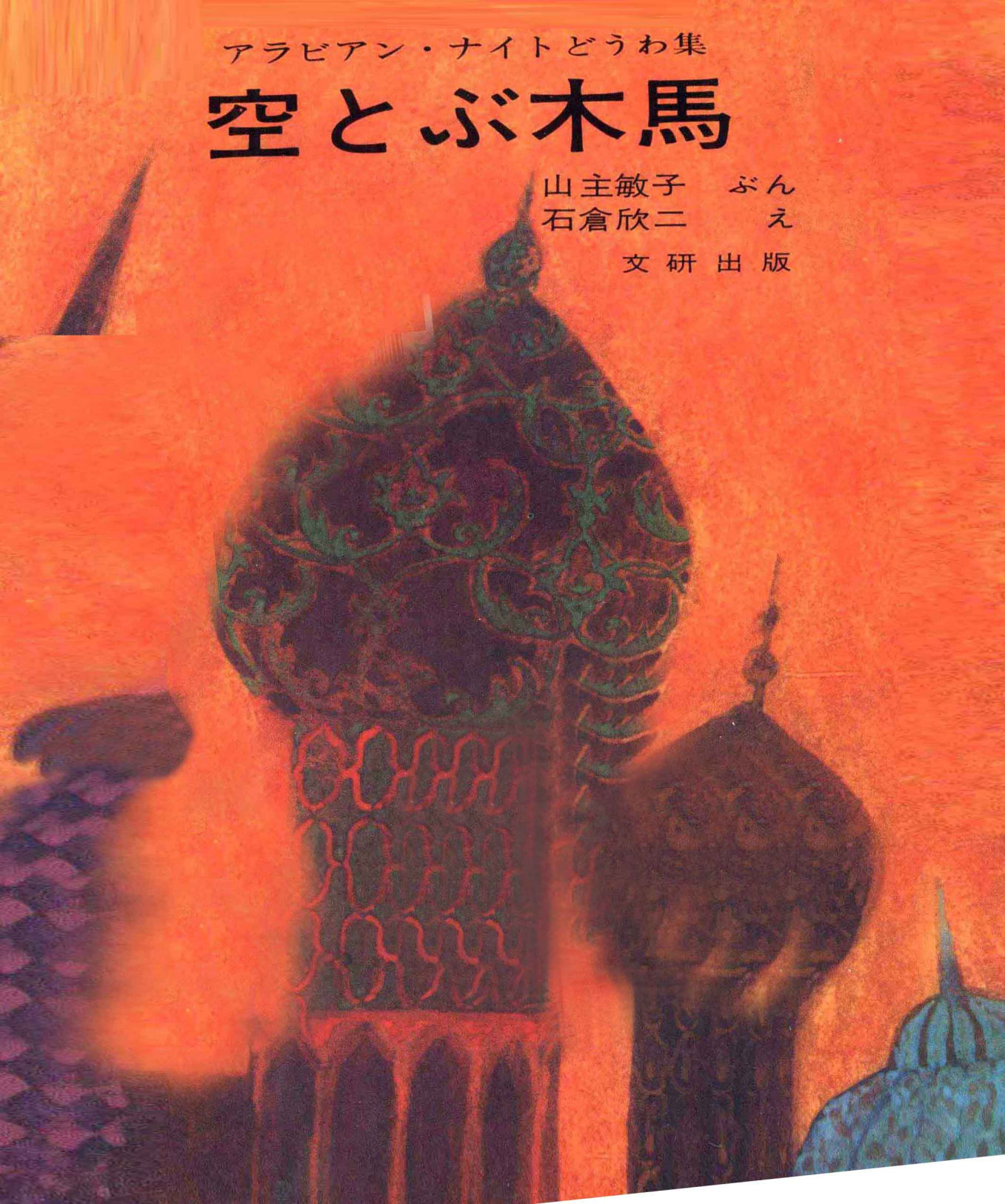
●トッド 作 ●白木茂 訳 ●小林与志 絵

アラビアン・ナイト どうわ集

空とぶ木馬

山主敏子 ぶん
石倉欣二 え

文 研 出 版





のろまのハッサンとロバ

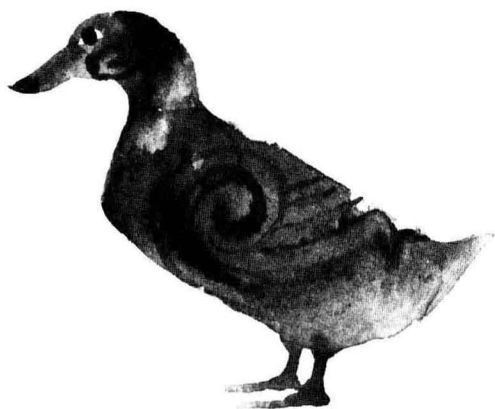
またロバにもどった	わるだくみ
30	26



四色しよくのさかな

黒 くろ いまもの	かべが二つに	石 いし になった足 あし
6	11	16





だまされたライオンの子

ノガモのしんぱい

にんげんからにげて

だいくさんのたてた家

61

57

52



空とぶ木馬

ふしぎなおくりもの

ひとりと十万人

王子はまほう使いか

きえたおひめさま

にせ医者になる

68

74

80

85

90



あかずのとびら

十一人のおじいさん

大ワシにさらわれる

なぞはとけたが

36

40

45



石倉欣二（いしくら・きんじ）

わたしは、香川県の丸亀という小さな城下町でそ
だちました。十八で東京にでて、上野にある東京
芸術大学にはいり、絵や彫刻や工芸をまなびまし
た。卒業後、〇電気という会社にはいって、工業
デザイナーとしてつとめておりましたが、考える
ところがあって独立し、フォルムデザイン社とい
う事務所をもちました。ここでいろいろな仕事を
しているうちに、ちょっとしたきっかけで童画に
であい、今はもうその魅力にとりつかれて、デザ
イナーだか童画家だかわからなくなってしまいま
した。これからもどんだんたのしい絵をかいてい
きたいと思っています。



山主敏子（やまぬし・としこ）

わたくしがはじめてアラビアンナイトを読んだの
は、みなさんとおなじ年ごろのことでした。

ランプをこすると大男がでてくる話がおもしろ
くて、くりかえし読んだものです。

そんなことを思いだしながら、いっしょうけん
めい書いたこの「空とぶ木馬」、みなさんもおも
しろいといってくださいるといいなと思っています。

四色しよくのさかな



黒くろいまもの 6

かべが二つに 11

石いしになった足あし 16

黒いまもの

むかしむかし、ひとりのしょうじきなりようしが、海へさかなをとりにいきました。ところがその日はどうしたことでしよう。なんべんあみをうつても、ひきあげてみると、さかなは一ぴきもはいってはいませんでした。三べんもむだをしたすえに、りようしは神さまにおいのりしました。

「神さま、わたしは一日に四へんしかあみをうたないことを、あなたさまもごぞんじでしょう。きようはまだなにもえものがありません。こんどは四どめのあみをうちます。どうかたくさんのさかなをおめぐみくださいますように。」

りようしは四どめのあみをうち、あみが海のそこにしずむまでまっていきました。それからあみを強くひっぱりました。



たいそう重いものがかかったらしく、なかなかあがりません。

「こりや重いぞ、えんやこらさ。」

りようしはいっしょうけんめい、やつとこさあみを海岸へひきあげました。ところがあみのなかにかかっていたのは、さかなではなくて銅のつぼでした。

（やれやれ、へんなものがかかったぞ。だがこんなに重いんだから、金貨でもつまっているのかもしれないぞ。）

りようしはかたくしまっているつぼのふたを
ようやくあけてみました。するとつぼか

ら、ヒュル ヒュル……と、ひとす

じのけむりが立ちのぼりました。

空いっぱいひろがったけむ

りは、たちまちまっ黒なまも

のの形になり、ずしんとりよ

うしのそばに立ちました。そ



の大きいことといったら、やねぐらいもあるあたまは、雲までとどきそうでした。

りようしはこわくてこわくて、ガタガタふるえていました。するとまものは、おもいのほか、やさしい声でいいました。

「ありがとうよ、じいさん。わしは千八百年もつぼの中にとじこめられていて、ずいぶんくるしい思いをした。やつと自由になれてこんなうれしいことはない。そのおれいに、すてきなものをあげるから、ついてきなさい。」

まものはのっしのっしと大またで歩きだしました。りようしはこわがわついていきました。やがて見たこともないみずうみの岸へつきました。

まものはりようしに、

「ここであみをうつてごらん。」

といいました。いわれたとおり、りようしはあみをうちました。

とあみをたぐりよせてみると、赤、白、青、黄と、色のちがつたさかなが四ひきはいっていました。

「なんてめずらしいさかなだろう！」



りようしは目をまるくしました。

「このさかなを王さまのところへもっていきなさい。おまえさんはこれからもこのみずうみでさかなをとってもいいが、一日に一ぺんだけにしてくれないか。」

まものがいったので、りようしは、

「えっ、これからもさかなをとってもいいのですか。」

とよろこびました。

「では、神さまのおひきあわせで、またあうこともあろう。」

というど、まものは足でじめんをけりました。するとじめんはまっ二つにさけて、まものをのみこんでしまいました。

りようしはまもののいったように、さかなをごてんへもって行って、王さまにさしあげました。

「ほう、こんなめずらしいさかなは、見たこともないのう。」

王さまもおどろきました。そしてりようしにごほうびのお金をたくさんくださいました。

かべが二つに

美しい四色のさかなは、大きな水がめの中へいれられて、一日じゅう王さまの目をたのしませました。あくる日になると、さかなはごてんのりよりばんのところへはこばれました。

りよりばんはさかなをフライパンにのせて、かたがわをやきました。それからひっくりかえそうとしたたん、台所のかべが二つにわれて、美しいまじよがあらわれました。まじよは手にもった長いさおをフライパンの中へつつこんで、

「これこれさかなよ、やくそくをまもらないの。」
といいました。

二ど三どとこのことをくりかえすと、四ひきのさかなはなべからあ



まをあげて、

「はいはい、おまもりいたします。」

と、歌^{うた}うようにこたえました。

りょうりばんはまじよがあらわれたとき、びつくりして気^きぜつしてしまいました。気^きがついてみると、もう台所^{だいどころ}のかべはもとのようにとじて、四ひきのさかなはまつ黒^{くろ}こげになっていました。

そこへ大臣^{だいじん}がやってきました。

「さあ、王^{おう}さまにさしあげるさかなのりょうりはできたであろうな。」



「大臣さま、それがどうもんだことでして。」

りょうりばんは、いまのふしぎなできごとをはなしました。

大臣はたいそうおどろいて、四色のさかなをもつてきたりょうしをよびにやりました。

「これ、りょうし、おまえがきのうもつてきたようなさかなを、もう一ど、ぜひとつてきてもらいたいのだじゃ。」

「はいはい、かしこまりました。」

そこでりょうしは、またみずうみへいって、とあみをうちました。まえと同じように四色のさかながとれました。さつそく大臣のところへもつていきますと、大臣はりょうりばんにさかなをわたして、いいつけました。

「こんどはわしの目のまえで、さかなをやいてみなさい。」

りようりばんは、またさかなをフライパンに入れて火にかけました。まもなくかべが二つにわれて、まじよがあらわれ、さかなはたべられないようにまつ黒こげになりました。

ふしぎなできごとをじぶんで見た大臣は、

「これは王さまにかくしてはおけない一だいじじや。」

と、ありのままを王さまにもうしあげました。

王さまはそれをきくと、

「わしがこの目で見とどけるほかはない。」

といって、またりようしにさかなをとつてくるようにいつけました。

一日に一ぺんしかさかなをとらないという、まもののやくそくをまもつて、あくる日になるとりようしは、同じさかなをとつてきました。王さまは、りようしにたくさんのお金をやりました。それから大臣に、

「さあ、わしの目のまえでさかなをやくのだ。」

とめいじました。

「かしこまりました。」

大臣はフライパンにさかなを入れて、火にかけました。するとどうでしょう！ かべがわれてものすごく大きくろんぼがでてきました。

黒いまものは、おそろしい声でさげびました。

「おい、さかなども、おまえたちはみんなむかしのやくそくをまもっているな。」

するとさかなたちは、フライパンからあたまをあげて、

「はいはい、やくそくはまもっていますとも。」

といいました。

黒いまものは、手にもった木のえだで、フライパンの中のさかなをひっくりかえすと、出てきたところから立ちさりました。

王さまがさかなをしらべてみると、みんなまつ黒こげになっていました。

「このさかなには、きつとなにかふしぎなわけがあるにちがいない。わしはきつとこのなぞをといてみせるぞ。」

王さまはけらいをつれ、りょうしにあんないさせて、さかなをとったみずうみへいってみました。